緒　言

歴史を調べるということは、きわめて厳格な事実の探求であるから、そこには日夜弛まぬ調査なり研究なりが続けられなければならない。こんな事はいまさら述べるまでもないことであるが、実際に一つの題目に向つて、幾年もつゞけてこの努力を重ねるということは、並大抵の業ではない。ところが、奈良国立文化財研究所はもともと奈良の地に在るという宿命からして、その昭和二十七年の創設以来、専ら平城宮跡を中心とする南都七大寺の調査、研究に取組んで、それ等の実態をすこしでも明らかにしようと努力をつゞけている。しかし、現在の研究員ほぼ五十名そこそこの人員では、いままでに平城宮跡の発掘調査にようやくその二割足らずを掘っただけであり、また七大寺の中では唐招提寺と西大寺との二つの寺の基礎資料の下調べだけがやっと済んだという程度で、これ等を日本文化史に結び付けるためには、まだまだ幾多の研究を積み重ねなければならないのが現状である。

然るに、近頃はとみに日本文化に対する一般の関心が高まってきている。それはまことに喜ばしい限りであるが、それだけに、そうした一般の方々を正しい文化史の上に導かなければならない。そのためには、こちらもひたすら間違いのない事実だけの歴史を探し求めなければならない。それは実にたいへんなことであるが、それをすこしでも期待できるのが、奈良の文化財研究所だといささか自負もしている次第である。しかし、この研究所の仕事を伸していくためには、どうしても文化庁をはじめとする諸々の文化機関関係の方々の大きな御援助を得なければならないし、またもっと広い社会一般の方々の深い御理解と絶えざる御厚意とをただただ請い願うばかりである。

昭和四十三年十二月

奈良国立文化財研究所長　小林　剛